

福井教授とタッグを組んだ企業の思い

新品種を作出するなど、今後も先生と共に生産技術向上を目指します。

福井先生とは、『岐阜花き流通センター農業協同組合』のセミナーの講師として、15年前に知り合いました。現在はスーパーアドバイザーとして、勉強会を開いてくださっています。私はスパティフィラムをメインに鉢花を生産していますが、夏の酷暑が最大の問題でした。それを相談したことが、今回の品種改良のきっかけです。

我々の仕事は、先生が組織培養してから約2ヵ月後、数センチの苗の状態から栽培することから始まります。無菌状態で培養された苗は、自力で水を吸えないので、一定の期間、培養土に移し、湿度を一定に保ちます。こうして1ヵ月ほど大気に慣れさせると、自分で生きる力がついてきます。その後も成長に合わせて鉢を変えていき、実際に出荷するまでトータルで1年半かかります。今後も、現場との繋がりを大切に、気さくな福井先生に問題を相談しながら、生産技術を向上させていきたいですね。



農業生産法人
有限会社フラワーウイング
代表取締役
高木 兼雄さん

4倍体のスパティフィラム



- 1 オランダで10年に一度開催される『フロリアード2012』で金賞・優秀品種に認定された。
- 2 右が4倍体。従来の2倍体(左)と比べ、花は丸みを帯び、やや小さめになった。
- 3 パラに関する研究では、消費者の好みや意識調査のための資料も作成している。

岐阜県は園芸産業が盛んであり、その生産量は全国3位。しかし、25年前は全国13位だった。この10数年間で生産量が伸びた陰には、地元の園芸業界と岐阜大学との密接な連携がある。2012年、生産者の声を受けて開発した観葉植物の新品種が世界最大の園芸博覧会で優秀品種に認定された。応用生物科学部園芸学研究室の福井博一教授に、開発に用いられた倍数性の技術と、今後の展望について伺った。

スパティフィラム × 倍数性の技術

岐阜独自の観葉植物の新品種を開発



岐阜大学応用生物科学部
園芸学研究室 教授

福井 博一

with 有限会社フラワーウイング

3年かけて開発した、 新種のスパティフィラム。

園芸学研究室は、園芸生産に関わる研究を行っていることから、産業界と密接な関係を持ち、生産現場と連携してきました。こうした取り組みにより、岐阜県の鉢花生産量は、かつての13位から3位へと躍進を遂げています。そして今、『岐阜花き流通センター農業協同組合』と共に新品種開発に取り組んだのが、新種のスパティフィラムです。

このスパティフィラムは花の部分小さく、全体的にコンパクト。また、暑さや寒さなどの耐候性に優れ、環境に対する抵抗力の向上が見られます。開発のきっかけは鉢花の一大生産地である岐阜県で、県のブランドとなる品種を作り出したいという、生産者の熱い思いでした。また岐阜市の産学共同研究開発助成が受けられたことも、弾みとなりました。

この開発には研究室で長年研究を続けてきた、倍数性の技術を用いています。倍数性とは、染色体の数を3倍や4倍などに倍加することで、花の色や形、香りなど、より良い性質を持つ品種を育成する方

もらい、岐阜県の生産者に生産してもらうことを考えています。岐阜大学としては、この種苗登録が第1号となりますが、これからも生産者と共に品種改良等に励み、産業界で評価される品種を作り出していきます。

園芸は感性に訴える産業。 環境問題も考えていきたい。

園芸産業は心を豊かにする産業です。例えば、農作物は残留農薬が問題視されま

研究室の 学生に聞く

大学院連合農学研究科
生物生産科学専攻2年
小笠原 利恵さん



生産現場と積極的に交流し、 園芸産業に貢献したい。

園芸植物の倍数体を用いた育種を研究しており、フェアリーウイングの研究にも携わりました。研究の成果が出た時は純粋に喜び、予想外の時は考え、調べ、次に生かす。研究の積み重ねが、園芸産業への貢献につながることにやりがいを感じ、やる気が出ます。

ですが、花は食べ物ではないので、関係ないと思われがちです。しかし、花は感性に関わる商品なので、農薬漬けで栽培しているという噂だけでイメージが悪くなり、消費者は購買意欲を無くしてしまっています。生産現場の環境改善についての提案も、大切な役割だと思っています。さらに輸入花との差別化を図るため、日本ならではの商品作り等、産業発展のために、今後ますます生産技術と流通のタイアップが重要となるでしょう。

法です。まず特殊な薬品を使用して、染色体を2倍に操作します。しかし、薬品には様々な種類があり、使用する薬品の種類はもとより、濃度、組織のどこにどういう状態で与えるかなど、組み合わせは無数にあります。一番効率的に4倍体の現象が表れる組み合わせを検証するため、何千もの個体を1個体ずつ分析した結果、ある1個体に4倍体の現象が表れました。その1個体を培養技術で大量に増やすため、新たに方法や条件を開発。このように課題を一つずつクリアし、実用的な新品種を開発に成功。研究には、実に3年の歳月がかかりました。

産業界に評価される品種こそ、 価値がある。

花の部分が妖精の羽をイメージさせることから、このスパティフィラムを『フェアリーウイング』と名付けました。そして今年、種苗登録をした後、世界最大の園芸博覧会『フロリアード2012』に出品したところ、金賞・優秀品種に認定されたのです。今後は岐阜大学の付属農場での生産販売と、岐阜花き流通センターで種苗を管理して